

第 14 回(令和 7 年度)「名古屋大学水田賞」

常 瀟琳『道理と風俗 水戸学と文明論の十九世紀』講評

常瀟琳氏による本研究は、日本思想史における 19 世紀の全体を視野に入れ、主として断絶と対立の関係において理解されがちであった水戸学と洋学との相互関係を、影響と批判的継承という新たな局面から再検討しようとする意欲的な研究である。具体的には、会沢正志斎から内藤耻叟へという水戸学の系譜と、古賀侗庵から中村敬宇へという洋学の系譜との相互的な影響関係を解明し、これらの思想的交錯の中から生まれた福沢諭吉の立場を明らかにするという議論の組み立てである。

幕末・維新期の日本政治思想史研究には、丸山眞男から渡辺浩、苅部直へと続く膨大な研究蓄積がある。本研究は、これら先行研究から多くを学びつつ、斬新な視点から日本思想史の動態を解明しようとする。結果として、本研究は、福沢への儒学思想の影響を強調する最近の研究成果を継承しながら、さらに、水戸学と福沢洋学との影響関係をも明らかにするという、独創的な成果を生み出した。

注目されるのは、こうした新機軸において採用された「道理と風俗」というアプローチである。いずれも儒学的伝統におけるキーワードであるが、常氏によれば、上の五名は皆、人間社会を貫く普遍的原理としての「道理」と、各国民の具体的な生活様式・習慣として現れる「風俗」との差異を認識し、そこから独自の議論を展開したという。彼らに共通する問題は、第一に、「風俗・民心」への注目であり、第二に、民の「風俗」を正しい「道理」へと導く方法を考えることであった。会沢の「億兆一心」、中村の「自由・自助」、福沢の「独立自主」というテーゼは第一の問題の産物であり、福沢における「智術」の強調、これと対立した内藤の「感情」論とは、第二の問題の帰結であった。「智」と「情」をめぐる両者の対立は、その後の日本思想史研究の重要テーマとなるが、常氏は明治以降における「感情」概念の展開を、今後の研究テーマの一つとしている。さらなる研究の進展が期待される場所である。

こうした本研究は、日本思想史にとどまらない思想史研究としての意義をもつと考えられる。西欧思想史で言えば、「道理」とは自然法や国際法概念と同義であり、「風俗」は「生活様式(マナーズ)」論や「道徳感情」論と重なる。いずれもヒューム、スミス、モンテスキュー、ルソー等にとっての重要問題であり、欧米と東アジアとの比較思想史の可能性を期待させる問題設定である。以上、本研究は思想史研究としての独創性と将来性を大いに評価できる、注目すべき成果であり、「名古屋大学水田賞」授与にふさわしいと判断する。

最後に、応募資格に国籍を問わない「名古屋大学水田賞」として、第 14 回において初めて、外国籍の受賞者を得たことは、まことに意義深いと言えよう。